ワーズワスとイザベラ・フェニク

William Wordsworth and Isabella Fenwick

宮　田　　実[1)]
Minoru MIYATA

はしがき

"Written 1801 or 1802. This arose out of my observation of the affecting music of these birds hanging in this way in the London streets during the freshness and stillness of the Spring morning."[1)]

これは William Wordsworth (1770-1850) の詩 *The Reverie of Poor Susan* につけられた I.F. note である。I.F. とは，Wordsworth 晩年の最上の友であった Miss Isabella Fenwick (1783-1856) のことである。Wordsworth の詩の書かれた時期，動機，状況等を我々に与えてくれるこの I.F. notes は，記述内容にやや不正確な点があるものの，Wordsworth の詩をより良く理解する上で貴重なものである。後で詳述するが，Wordsworth が Miss Fenwick に口述したこの notes は 1843年，即ち Wordsworth が73才の時に書かれた。このような高齢に達してから，しかもかなりの量の注釈を残したということは Wordsworth の驚異的な記憶力を示すものと言える。同時に，Miss Fenwick の Wordsworth に対する献身的な態度も注目に値する。そこで本稿では，2人の出会いから Miss Fenwick の死までを概観し，お互いの存在意義を明らかにすることによって Wordsworth の晩年の生活の一端を探ってみたい。同時に，Miss Fenwick がどういう女性であったかを考察したい。

1. 2人の出会い

Miss Fenwick は1783年に Northumberland の Edlinghamで生まれた。Wordsworth との関係で最も重要な事は，彼女が Henry Taylor (1800-1886) の継母と従姉妹同志であり，彼とは親しい間柄であったということである。英国植民省に所属していた Taylor は劇作家でもあり，*Isaac Comnenus* 等3つの戯曲を残している。彼は1823年の秋に湖水地方を訪れた時，詩人 Robert Southey に会って親交を結んだ。同じ湖水地方に住む Wordsworth と Southey はそれよりずっと以前から親交があった。こういう関係から Miss Fenwick は Taylor を通じて，また Southey を通じて Wordsworth と知り合うことになるのである。

1795年 Dorset 州の Racedown Lodge で妹 Dorothy との生活を始めて以来，Wordsworth の周囲には彼にとって重要な女性たち (female companions) が存在した。その主な者として，妹 Dorothy，妻 Mary，Mary の妹 Sara Hutchinson，娘 Dora，そして Miss Fenwick がいた。長い旅行に出かける時は，その内の誰かが Wordsworth と同行することが多かった。1837年 Wordsworth は Mr. H. C. Robinson と大陸旅行をした。6月4日旅先より Dora 宛の手紙の中で，Miss Fenwick に同行し

＊昭和57年9月8日原稿受理
1) 大阪産業大学教養部

てほしかった旨を述べた後，"...I never shall go from home for any time again, without a female companion."[2] と言っている。Miss Fenwick は Wordsworth にとって理想的な 'female companion' の1人だったのである。その後 Wordsworth が1838年に博士の学位を受ける為に Durham 大学へ行った時，また1841年に懐かしの Alfoxden，Tintern 等を訪れた時にも Miss Fenwick が同行したのである。

Wordsworth と Miss Fenwick の最初の出会いの時期についてはいくつかの説がある。Mary Moorman は Wordsworth の伝記の中で，"...she appears to have visited Rydal Mount in 1833, with Kate Southey." と述べ，更にその箇所の脚注で，"D. W. mentions her in her journal, as calling on July 18th and, with Southey and Kate, dining at Rydal Mount on July 20th 1833." と説明している。[3] Rydal Mount は Wordsworth が1813年5月から彼の半生の住み家としたところである。

Hunter Davies は1980年に出版した *William Wordsworth: A Biography* の中で，"They first met in the early 1830s, when Wordsworth was sixty-five and Miss Fenwick was about fifty. She came across from Greta Hall for dinner one night, with Southey and his daughter Kate."[4] と書いているが，Wordsworth が65才の時は1835年に当たり，これが 'early 1830s' というのは矛盾する。しかし，Miss Fenwick が50才の頃（1833年頃）という点と，Southey 父娘が Rydal Mount で食事をしたという点は Moorman の説と一致するので，おそらく Davies も1833年説をとっているのであろう。

一方，Alan G. Hill は，"W.W. had met Miss Fenwick by 1830, if not earlier, for Henry Taylor brought her to Rydal towards the end of that year,..."[5] と述べている。この記述は Grasmere にある Wordsworth Library の *Rydal Mount Visitors Book* に基づいているのであるが，1830年の末には Wordsworth は Rydal Mount に居なかった。彼は11月1日より翌年の4月末にかけて Coleorton, Cambridge, London 等に滞在していたのである。[6] 故に，もし Taylor が11月又は12月に Miss Fenwick を Rydal へ連れて来たとしても Wordsworth には会えなかったはずである。しかし，'towards the end of that year' が10月を意味するならば，この推測は当らないだろう。ただし，Wordsworth は10月はずっと Rydal に居たのではなく，正確な日数はわからないが，23日に Rydal に戻るまで Whitehaven を訪れていたのである。[7] Hill は先程引用した箇所のすぐ後で，"...according to D.W.'s MS. Journal she returned with Mr. and Mrs. George Taylor on 2 Aug. 1831, while Henry Taylor was also visiting the Lakes." と説明している。1831年の8月2日は，Hill が編集した Wordsworth 兄妹の書簡集の発信地から判断すると，Wordsworth は Rydal に居た可能性が大きいのである。[8]

以上3人の説を比較検討してみると，Hill の1830年説が，最初の出会いとしての真実性が最も強く，Moorman 及び Davies の 1833 年説は誤りであろう。[9] ただし，Hill の 1830 年説は前述した通り，Miss Fenwick が Rydal を訪れたとしても Wordsworth に会えなかった可能性が大きいので，結局，1831年8月に2人の初めての出会いがあったと考えるのが妥当であろう。

1831年頃の Wordsworth は61才という年齢であったが，身体的には時折眼が疲れやすくなることを除けばおおむね健康であった。生来の旅行好き（放浪癖）は一向に衰えず，9月から10月にかけて娘 Dora と共に Scotland に Sir Walter Scott を訪ねている。その時，Scott の案内で Yarrow 川を訪れ，*Yarrow Revisited* という詩を書いた。旅から帰った直後の10月19日 Basil Montagu に宛てた手紙の中で，"—— travelling agrees with me wonderfully....I find nothing so feeding to my mind as change of scene, and rambling about;..."[10] と述べ，彼にとって旅行がいかに重要な意味を持っているかを主張している。

しかし，精神的には幾多の苦痛の種があったのである。特に衝撃的なできごとは，1829 年詩人

としてのWordsworth にとって最も重要な companion であった妹 Dorothy が急病で倒れたことであろう。一旦は回復したかにみえたが，1831年の暮に病気が再発し，歩行困難となり，あの楽しかった兄との散歩も思うようにならなくなり，若い頃のような2人の一体感は薄れていった。また，1830年代にWordsworth は大切な友人を相次いで失っている。1830年には William Hazlitt が，1832年には前年訪れたばかりの Scott が，1834年には S. T. Coleridge と Charles Lamb が，そして1835年には Sara Hutchinson が他界したのである。最愛の娘 Dora の健康状態もすぐれず，父親を大いに悩ませたようだ。このように Wordsworth の精神状態が不安定な時，即ち1830年代の中頃から Miss Fenwick と Wordsworth 家との交際が本格的に始まる。[11]

2. Miss Fenwick の Wordsworth 観

Wordsworth に初めて会った時の Miss Fenwick の感激は次の手紙の一節から充分窺える。——"I think I said to you then, I would be content to be a servant in the house to hear his wisdom."[12] この出会いは2人の生涯を通じて最も画期的なできごとの1つと言っても過言ではない。1839年1月4日 Henry Taylor 宛の手紙で Miss Fenwick は，"What strange workings are there in his great mind, and how fearfully strong are all his feelings and affections! If his intellect had been less powerful they must have destroyed him long ago;..."[13] と述べ，Wordsworth の精神力の強さ，そしてそれに優る豊かな知性に驚嘆している。だからといって，彼女は Wordsworth を盲目的に敬愛したのではなく，彼の性格的な欠点をもよく知っていた。[14] しかし，彼の性格的な長所，詩的天才に対する敬意は常に変わらなかったようである。

彼女はしばしば Rydal を訪れ，時には3ケ月も滞在することがあった。当時 Wordsworth を訪れる友人，知人の中にはこのように長期にわたって滞在する人は，かなりいたようである。特に Wordsworth の名声が高くなってからは来客も増えた。1848年8月2日，Mary Wordsworth は Miss Fenwick に宛てて次のように書いている。

> ...my husband and I are alone, at least at *breakfast*——soon afterwards we may look for Tourists, who by hook or by crook make their way to us. It seems to me as if America had broken loose, so many, especially from New York, of that country make their way to the Poet——for my part I see few of them——but my dear husband receives all strangers cordially——and it does him good to talk to them.[15]

Rydal Mount はすでに湖水地方の一観光地になっていたのである。見ず知らずの人々が遠くから自分に会いに来てくれることは Wordsworth にとって嬉しいことであったに違いない。しかし，1日に30人近い訪問客がある時には，彼らを避ける為にしばしば Miss Fenwick の住む Ambleside へ歩いて行ったらしい。このことは Miss Fenwick を大いに喜ばせた。[16] 同じ Ambleside に1842年以来住んでいた小説家の Harriet Martineau は2人の様子を観察して，Robinson に，"——he goes every day to Miss Fenwick (he always needs some daily object) she is the worthiest possible, gives her a smacking kiss, & sits down before her fire to open his mind——"[17] と報告している。やや誇張しているように思えるが，このことから，Miss Fenwick が Wordsworth にとって心を開いて話すことのできる友人の1人であったと断言できよう。

1840年 Wordsworth の70才の誕生日を祝って Miss Fenwick はドイツ製のかっこう時計 (cuckoo clock) をプレゼントした。かっこうは Wordsworth の好きな鳥であり，*To the Cuckoo* という詩の中で，かっこうを 'darling of the Spring' 'blessed Bird' と呼び，少年時代の彼にとっては，'a hope' であり 'a love' であった。ちょうど70才の誕生日に Wordsworth は *The Cuckoo-Clock* と

いう詩を書き，その中で，眠れない夜この時計の優しい時報が心をなごませてくれると書いている。そしてこの詩につけられた I.F.note の中で，この時計が親しい友（Miss Fenwick の名前は書いていない）による贈り物であり，その友がこの notes を書いたと語っている。

また Miss Fenwick は Wordsworth の 73 才の誕生日を祝って 120 人あまりの村の子供達を Rydal Mount に招待し，祝宴を催している。翌年74才の誕生日を祝って更に大規模なパーティーを企画した。4月7日 Mary は Robinson に宛てて，"...on Tuesday next our good Friend is to make some 3, or 400 School Children happy in giving a fete at Rydal Mt to celebrate the Laureat's 74th birth day."[18] と述べている。'our good Friend' はもちろん Miss Fenwick を指す。このような誕生日の祝い方は，Wordsworth に対する真の友情の表われであり，子供好きの彼を喜ばせたことは容易に推測できる。

1847 年最愛の娘 Dora の死は Wordsworth に精神的に大きな打撃を与えた。このことは Miss Fenwick の目にも映り，1849年6月彼女は，"I see no difference in Mrs. Wordsworth; but his [i. e. Wordsworth's] darker moods are more frequent, though at other times he is as strong and as bright as ever..."[19] と述べている。そして1850年4月，Wordsworth の訃報に接した彼女はこの世での使命を果たした詩人を次のように讃えている。

> He did the work he had to do in this world nobly. His last years were given for the good of his own soul. I am anxious to be with my beloved Mrs. Wordsworth.[20]

Wordsworthの死後も Miss Fenwick と Wordsworth 家とのつながりは続く。即ち，Miss Fenwick は Mary にとって大きな心の支えとなるのである。

3. Wordsworth の Miss Fenwick 観

Wordsworth の Miss Fenwick 観は，1840年に書かれた2つのソネット（*On a Portrait of I. F. painted by Margaret Gillies, To I. F.*）と1839年から1840年にかけて書かれたといわれるもう1つの無題のソネットに凝縮されている。ここでは *To I. F.* に注目したい。このソネットは 1840 年2月 Rydal Mount で書かれ，1851 年に甥の Christopher Wordsworth による *Memoirs of William Wordsworth* の中で初めて紹介された。

TO I. F.

THE star which comes at close of day to shine
More heavenly bright than when it leads the morn,
Is Friendship's emblem, whether the forlorn
She visiteth, or, shedding light benign
Through shades that solemnize Life's calm decline,
Doth make the happy happier. This have we
Learnt, Isabel, from thy society,
Which now we too unwillingly resign
Though for brief absence. But farewell! the page
Glimmers before my sight through thankful tears,
Such as start forth, not seldom, to approve
Our truth, when we, old yet unchill'd by age,
Call thee, though known but for a few fleet years,
The heart-affianced sister of our love!

1行目の 'the star' は Miss Fenwick を象徴し，'at close of day' は Wordsworth の晩年を意味する。即ち，彼女がやや沈みがちな詩人の日々に希望に満ちた輝かしい光を投げかけるのである。そのような輝く光を持つ星は偉大な力を持ち，「幸福な者をより幸福にする」(make the happy happier) のである。Miss Fenwick と過ごす時間はあっという間に過ぎる。彼女のことを 'The heart-affianced sister of our love' と呼ぶ時，詩人の目に喜びの涙があふれる。Wordsworth 家の者にとってこれ以上の友はなかったであろう。Christopher が言うように，Wordsworth の Miss Fenwick に対する深い愛情はこのソネットの中に 'gracefully and sweetly' に表現されている。[21]

次に日常生活で Wordsworth が Miss Fenwick をいかに慕い，信頼し，大切にしていたかを考えてみたい。まず Wordsworth が Miss Fenwick に宛てた数多くの手紙の末語に注目しよう。その主なものは，'my precious friend', 'my excellent friend', 'my beloved friend', 'my very very dear friend', 'most dear friend', 'your devoted friend', 'heart-sister' である。Wordsworth が Miss Fenwick 以外の友人にこのような親しい表現を使っている例が少ないことから Wordsworth にとって彼女がいかに大切な友であったかがわかる。このことを証明する他の例として，1836年1月 Wordsworth が孫 William の名付け親 (godmother) になってくれるよう Miss Fenwick に依頼したことが挙げられる。そしてその依頼の理由として，"I have therefore turned my thoughts to you as in the first rank of those whom we love and esteem"[22] と述べている。なお他の2人の 'godfathers' は，数学者で Dublin の Trinity College の天文学教授であった William Rowan Hamilton と詩人の Robert Southey であった。[23]

1836年11月4日，数ケ月先の大陸旅行に出かける直前の London 滞在に思いを馳せる Wordsworth は Taylor に宛てて，"The pleasure of being with Miss Fenwick and you during my short stay in London will be one of my great inducements to leave home."[24] と述べ，更に12月19日同じく Taylor に，"...say to Miss Fenwick, with our joint love that under any circumstances I trust I shall see her, either in London or at her own home, in the course of the spring."[25] と述べている。いずれもMiss Fenwick に会いたい気持がよく表われている箇所である。

現在 Rydal Mount には3つの terrace がある。'sloping terrace', 'far terrace' そして 'level terrace' である。'level terrace' は Wordsworth が Miss Fenwick のために作ったものである。[26] この terrace は平坦なので晩年の Wordsworth にとって歩きやすく，お気に入りの場所であった。また，Miss Fenwick にいつもそばにいてほしいという気持から，Wordsworth は1844年 Rydal Mount のすぐ下の 'Dora's Field' として知られている土地に Miss Fenwick の家を建てようと計画した。7月17日 Miss Fenwick に宛てた手紙で，"Mary laughs at my frequent visits to the Site we have fixed upon and indeed it is a strong object of attraction to me, very sheltered and easy of access, and when part of the rock down which the steps lead shall be quarried out, the House will command a pleasing view towards the Church and the fells as well as the beautiful one of Rydal lake."[27] と述べているように Wordsworth はこの計画に大変熱心であった。しかし，結局，地主の許可が得られず，この計画は実現しなかった。しかしながら，その後も Miss Fenwickのための家捜しは精力的に続けられたのである。

1844年9月19日の手紙には，Wordsworth の Miss Fenwick に対する謙虚な態度が見られる。74才に達した詩人の嘆きは，"...the spirituality of my Nature does not expand and rise the nearer I approach the grave, as yours does,..."であり，かつてほどの読書に対する興味もなくなり，"...I feel that I am becoming daily a much less instructive Companion to others.——Excuse this Egotism, I feel it necessary to your understanding what I am, and how little you would gain by habitual intercourse with me, however greatly *I* might benefit from intercourse with you."

と述べている。[28] しかし，そう言いながらも現実としては彼女との交際を続けることになるのである。このような謙虚な言葉が使われた背景には，もちろん老齢という身体的な原因はあったであろうが，その他に妹 Dorothy の病状が一向に良くならないことや，娘 Dora の病弱など精神的な原因もあったように思われる。

以上のことから，Wordsworth にとって Miss Fenwick がいかに大切な人物であったかがわかる。Quillinan が感じたように，"...I do not think they [i. e. Mr. and Mrs. Wordsworth] can now live at perfect ease without her [i. e. Miss Fenwick]."[29] だったのである。

4. 様々な Miss Fenwick 像

次に Wordsworth 以外の人々が Miss Fenwick をどのように評価していたかを考察したい。Wordsworth 家の中で Wordsworth と同じ位 Miss Fenwick と親しく交際した Mary は，"But O what a blessing to possess such a heavenly mind as is ever yours!"[30] と述べている。'heavenly mind' とはまさに最高の讃辞といえよう。

Wordsworth の娘 Dora と結婚した Quillinan は，"...never was such an admirable woman."[31] と述べ，また，"She is a *trump*. There is more solid sense in union with genuine goodness in her than goes to the composition of any hundred & fifty good & sensible persons of every day occurrence."[32] と彼女を絶讃している。更に，Miss Fenwick に対し，'heavenly-minded' という形容詞を使っている。[33] Quillinan がこのように称讃するのは，ある意味では当然のことなのである。というのは，Miss Fenwick は Wordsworth 夫妻と同じ位 Dora と親しく接していた。そして，Dora と Quillinan との結婚に大反対していた Wordsworth を根気よく説得したのは，他ならぬ Miss Fenwick だったのである。Miss Fenwick がいなければ，2人は結婚できなかったと言っても過言ではない。2人は1841年 Miss Fenwick の住んでいた Bath で結婚式を挙げた。故に，Quillinan が Miss Fenwick を称讃するのは当然だと言えよう。しかし，このことが称讃の理由の1つにしかすぎないことは以下の他の人々の Miss Fenwick 像から明らかであろう。

Robinson は Miss Fenwick のことを 'an excellent lady',[34] 'a very sensible & gentlewomanly lady of fortune',[35] 'an admirable person',[36] 'A lady universally beloved for the rare union of the warmest religion with perfect liberality',[37] 'a woman of remarkable intelligence and benignity combined',[38] 'an admirable companion'[39] 等と評している。

S.T. Coleridge の娘 Sara は1846年 Aubrey de Vere に宛てた手紙で Miss Fenwick を高く評価し，"Her mind is such a noble compound of heart & intelligence, of spiritual feeling & the most perfect femininess....A more generous & a tenderer heart I never knew."[40] と述べ，彼女の知性，優しさを讃美している。

次に3人の Wordsworth の伝記作者の Miss Fenwick 観に注目したい。Harper は，"Hers was an enthusiastic, loving nature, readily exalted, capable of being deeply depressed, and constantly moved with religious feeling."[41] と説明し，更に，"She seems to have had, in full measure, the gift of consolation and encouragement for those whom she loved."[42] と付け加え，Miss Fenwick の豊かな感受性，宗教心，並びに包容力を強調している。しかし同時に，彼女のことを，'estimable, but overexcitable lady',[43] 'a perfervid and credulous hero-worshipper'[44] とやや批判的な見方もしている。

Moorman は Miss Fenwick を次のように評している。

> Well read without being a blue-stocking; religious without being sentimental or bigoted; vivacious, warm-hearted, and sensible, she was one of those beings who seem ideally

fitted to be the friend and adviser of families. Wordsworth, in the last dozen years or so of his life, became devoted to her and in many respects dependent on her judgement.[45]

前半では彼女の多様な長所を，後半では彼女の Wordsworth に対する多大な影響力を指摘している。

Davies は，"Miss Fenwick was well read, something of an intellectual (though she had no literary pretensions herself), generous, warm-hearted and of a liberal inclination"[46] と述べ，やはり彼女の知性，寛大さを指摘している。

以上の如く，Miss Fenwick に対する見方にはほぼ共通したものがあり，知性，人格共に豊かな人間像が浮かび上ってくる。Miss Margaret Gillies によって描かれた Miss Fenwick の肖像画[47] を見ると，その表情から彼女の豊かな知性を窺い知ることができる。Wordsworth はこの肖像画についてのソネットを書いており，その中で，「編んだ髪」は 'majesty' を，「唇」は 'meekness' を示し，その「目」の中に人々は 'Earth's purest light Heaven opens upon me' を見るなどと詩人らしい想像力豊かな観察をしている。[48]

5. I.F. notes と Miss Fenwick の死

冒頭で述べたように，Wordsworth の詩を理解する上で I.F. notes は大変貴重なものである。E. de Selincourt によれば，1843年 Miss Fenwick に口述されてできたこの notes の元の原稿は残っていないが，その後 Quillinan と Dora が書き写したものが残っている。2人はその年の8月に書き終えている。I.F. notes に関して重要なことは，これが Wordsworth の希望でできあがったのではなく，Miss Fenwick の要請によって口述されたということである。このことは彼女の Wordsworth に対する熱い友情だけでなく，彼の詩に対する深い尊敬の気持を示していると言えよう。

この I.F. notes は Dora に献げられたものだが，彼女が1847年に永眠した時にはまだ Miss Fenwick が所持していた。しかしその後 Dora の夫 Quillinan に手渡された。そこで Wordsworth の死後，Quillinan が彼の伝記を書くだろうと思われていたが，Dora が亡くなった1847年，Wordsworth 夫妻は甥の Christopher に伝記を書く許可を与えていた。これは Mary の進言によるものであり，Wordsworth は Christopher が忙しいだろうと思って依頼することについては消極的だった。しかし Mary が Christopher に依頼して合意されたのである。こういう結果になった直接の理由として，Dora の死後 Quillinan と Wordsworth 夫妻の間に起きた小さな不和が考えられる。Robinson によれば，妻の死後，慰めを必要としていた Quillinan の所へ Wordsworth が訪ねて行かなかった。そしてそのことが Quillinan を憤慨させたということである。Miss Fenwick は Quillinan のこうした短気な性格を嘆いて，"Mr. Quillinan but for that *touchiness* which we lament in him——might have been the most *helpful* friend & the greatest comfort both to Mr. & Mrs. Wordsworth could have had."[49] と述べている。また Mary も Quillinan のそうした性格を嫌って，"...he is easily offended."[50] と Miss Fenwick に語っている。しかし，この不和も Robinson の尽力によって1848年の初めには解消していた。

そして1850年4月30日，Wordsworth の死後1週間たって Quillinan は初めて伝記に関する Christopher と Wordsworth との間の合意書を見せられた。彼にとってはつらいことだったに違いない。しかしながら彼は Wordsworth の要請通り，Christopher に I. F. notes を提供することにした。5月21日，Robinson に宛てた手紙で Quillinan は，"There is no doubt that you & I both knew Wordsworth much better than his nephew knew him: but in some respects he is quite the proper man;..."[51] と述べ，自分が Wordsworth の伝記を書かせてもらえなかったことに対するく

やしさを漏らしている。

1851年，Christopher による *Memoirs of William Wordsworth* が出版された。Mary はその出来ばえに満足していた。しかし，Robinson は，"I am glad to find that even she [Miss Fenwick] is not pleased with the Memoir of her friend the poet——"[52] と述べているように，Miss Fenwick と共にその作品に対して批判的だった。Miss Fenwick はその作品の執筆期間の短かったことを指摘し，"It was written in far too great a hurry. The original idea of it was good; but time was wanting to select his materials and condense. A few years hence a better life may be written."[53] と述べている。*Memoirs of William Wordsworth* は Darbishire も言っているように，あまり出来ばえはよくない。これは今日の一般的な評価である。もし，少なくとも Christopher よりも長い期間 Wordsworth と親しく交際した Quillinan 或いは Miss Fenwick が執筆していたとすれば，*Memoirs of William Wordsworth* とはかなり異った伝記が生まれていたことであろう。

I. F. notes は結局 Christopher が伝記完成後，Quillinan に返したと推測されるが，Quillinan は1851年7月に急死しており，この点に関しては別の機会にゆずりたい。

Harperの"...the 'Fenwick notes,' or explanations of his poems dictated to her by Wordsworth in 1843, should not be too unquestioningly depended upon."[54] という警告はあるものの，I. F. notes は Wordsworth の詩に関する貴重な資料を提供してくれるという点で，その存在価値は大きい。

1855年 Dorothy が長い療養生活の後他界した。そして 1856年12月，Miss Fenwick は Mortlake にあった Taylor の家で73才の生涯を終えた。Lord Monteagle は彼女の最期を，"It was calm & resigned as all her life had been. She has left few larger & nobler hearts on the face of this world of ours."[55] と説明し，彼女の豊かな心を讃えている。Aubrey de Vere は Taylor から Miss Fenwick の死の報告を受けて，"I shall ever remember her as one of the noblest and most great-hearted beings I have been permitted to know."[56] とやはり彼女の気高い心を強調している。また，Taylor は Miss Fenwick を失った時，Wordsworth を失った時と同じような気持になったと述べ，更に，"I felt that it was time she should receive elsewhere the reward of a life of love and beneficence as nearly divine as any life upon earth that I have known or heard of or been capable of conceiving."[57] と告白している。この 'life of love and beneficence' こそ Miss Fenwick の生涯を端的に表していると言えよう。

む　す　び

この小論では Wordsworth と Miss Fenwick との関わりに焦点を当て，お互いの存在がいかに大きな意味を持っていたかを考察してきた。Miss Fenwick にとって Wordsworth は偉大な詩人であり，良き話し相手であり，また兄のような存在でもあった。一方 Wordsworth にとって Miss Fenwick は彼の詩の良き理解者であり，良き話し相手であり，また妹のような存在でもあった。2人は遠く離れている時は互いに手紙の相手となり，一緒にいる時は家族同様であった。筆者には Miss Fenwick は Dorothy の後継者のように思える。Wordsworth の青年及び壮年時代に Dorothy が果した役割を，晩年には Miss Fenwick が担ったのである。すばらしい妻，妹，友人に恵まれた Wordsworth は実に幸福な人間であったと言えよう。

〔付記〕 本研究は昭和56年度大阪産業大学特別研究費の補助を受けて行われたものである。ここに謝意を表する。

注

1) E. de Selincourt (ed.): *The Poetical Works of William Wordsworth* (Oxford U.P., 1940-9), Ⅱ, p. 507.
2) E. de Selincourt (ed.): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Later Years* (Oxford U. P., 1939), p. 866.
3) M. Moorman: *William Wordsworth: A Biography, The Later Years* (Oxford U. P., 1965), p. 541.
4) H. Davies: *William Wordsworth: A Biography* (Weidenfeld and Nicolson, 1980), p. 315.
5) A.G. Hill (ed.): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Later Years, Part II,* 2nd ed. (Oxford U. P., 1979), p. 495.
6) A. G. Hillは，"W.W., M.W., and Dora W. left Rydal Mount for Cambridge on Monday, 1 Nov." と 注釈している。(*Ibid.*, p.337) また，337ページから380ページまでの W. W. の手紙の発信地を参照されたい。
7) Dorothyは10月24日 Mary Anne Marshallへの手紙で，"My Brother, Sister and Dora arrived at home yesterday——" と書いている。しかも，その手紙の日付に関する脚注で Hillは，"This letter was written the day after W.W., M.W., and Dora W. finally returned to Rydal," と書いていることから，彼らの Whitehaven での滞在はかなり長かったようである。(*Ibid.*, p.331)
8) Wordsworthの7月25日付 Miss Carlyle宛，8月3日付 Samuel Butler宛，8月8日付 Basil Montagu 宛の手紙の発信地はすべて Rydal Mount となっている 。(*Ibid.*, pp. 416-8)
9) 1832年2月23日 WordsworthはHenry Taylorに宛てて，"I hope your Father and Mother, and Miss Fenwick are well——"と述べていることから，少なくともこの時より以前に2人の出会いがあったと判断すべきであろう。(*Ibid.*, p. 495)
10) *Ibid.*, p.439.
11) Mary E. Burtonが編集した *The Letters of Mary Wordsworth* (Oxford U.P., 1958) によれば，MaryがMiss Fenwick に最初の手紙を出したのは1835年4月25日である。また，Wordsworth 兄妹の書簡集 では，Wordsworth の Miss Fenwick への最初の手紙の日付は，1835年6月の最終週となっている。
12) Quoted by G.M. Harper, *William Wordsworth: His Life, Works and Influence,* 2nd ed. (John Murray, 1923), Ⅱ, p. 406.
13) E. Dowden (ed.): *Correspondence of Henry Taylor* (Longmans, 1888), pp. 109-10.
14) "I feel quite sure that I know *all his* faults,..." (*Ibid.*, p. 114)
15) *The Letters of Mary Wordsworth,* p. 299.
16) "...I am very glad when he finds his way here alone, and makes my abode a kind of refuge." (*Correspondence of Henry Taylor,* p. 94)
17) E.J. Morley (ed.): *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle* (Oxford U. P., 1927), p. 621.
18) *Ibid.*, p. 551.
19) Quoted by H. Taylor: *Autobiography of Henry Taylor* (Longmans, 1885), Ⅱ, p. 55.
20) *Ibid.*, p. 56.
21) C. Wordsworth: *Memoirs of William Wordsworth* (Moxon, 1851), I, p.21.
22) *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Later Years* (1939), p. 774.
23) 井上義昌編『英米故事伝説辞典 増補版』(冨山房，1972) 135ページの 'Christening' の項に，「洗礼式に立ち会って名を与えるいわゆる名づけ親 (godparents) は，男児出生のときは godfather (代父，教父) がふたり，godmother (代母，教母) がひとり，女児であれば godmother がふたりに，godfather がひとりである。」という解説がある。

24) *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Later Years* (1939), p. 815.
25) *Ibid.*, p. 821.
26) *Memoirs of William Wordsworth,* I, p. 21.
27) *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Later Years* (1939), p. 1211.
28) *Ibid.*, p. 1223.
29) *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle,* p. 506.
30) *The Letters of Mary Wordsworth,* p. 286.
31) *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle,* p. 499.
32) *Ibid.*, p. 506.
33) *Ibid.*, p. 485 & p.533.
34) T. Sadler (ed.): *Diary, Reminiscences, and Correspondence of Henry Crabb Robinson,* 3rd ed. (Macmillan, 1872), Ⅱ, p. 211.
35) *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle,* pp. 421-2.
36) *Ibid.*, p. 653.
37) *Ibid.*, p. 673.
38) *Ibid.*, p. 754.
39) *Ibid.*, p. 756.
40) *Ibid.*, p. 9. Quoted by E.J. Morley.
41) G.M. Harper: *op. cit.*, Ⅱ, p. 405.
42) *Ibid.*, p. 406.
43) 44) *Ibid.*, p. 408.
45) M. Moorman: *op. cit.*, pp. 541-2.
46) H. Davies: *op. cit.*, p. 315.
47) この肖像画は，*The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle* の672ページと673ページの間に挿入されている。
48) *The Poetical Works of William Wordsworth,* Ⅲ,pp. 412-3.
尚，このソネットには次のような注釈がつけられている。"These lines were found in W.'s Pocket Note-book of 1839-40, which has been edited with a commentary by G.H. Healey, with whose permission they are here reproduced. They have no title, but as Mr. Healey points out, the reference to the braided hair (1. 5) suggests that the portrait is that of I.F."
49) *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle,* p. 660.
50) *The Letters of Mary Wordsworth,* p. 291.
51) *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle,* p. 739.
52) *Ibid.*, p. 784.
53) Quoted by H. Taylor: *Autobiography of Henry Taylor,* Ⅱ, p. 58.
54) G.M. Harper: *op. cit.*, Ⅱ, p. 408.
55) *The Correspondence of Henry Crabb Robinson with the Wordsworth Circle,* p. 816.
56) *Correspondence of Henry Taylor,* p. 221.
57) *Autobiography of Henry Taylor,* Ⅱ, p. 115.